

途上国アルバム：ミャンマー・シャン州でのワークキャンプ

林 薫
文教大学教授

今年の3月、ミャンマーに行ってきました。日本国際ワークキャンプセンター（NICE）とミャンマーのNGOであるCOM (Charity Oriented Myanmar)のご協力を得て、学生の現地実習とボランティア活動を今後立ち上げるための準備でした。行った場所はシャン州南部のpayar・タウン Payar Taung 村。行政上はニャウン・シュエ Nyaung Shwe 市に属し、ヤンゴンからニャウン・シュエまでバスで11時間。さらに、そこからインレ（Inle）湖の船で4時間かけていく場所です。村は人口500人。もともと住んでいた人びとに加え、1962年に日本の戦後賠償で建設されたバルーチャン（Balu Chaung）発電所・ダムで水没、移転した村民が多いところです。同発電所は1972年に日本のODA（円借款）で拡張されました。水没・移転から40年～50年を経て、現地の産業は農漁業が中心で全国平均の所得よりも低いですが、生活レベルはそれほど低くないと思いました。シャン州は1991年まで複数の集団の独立闘争が続いていたことから、中央政府の公共事業も不足しています。教育に関しては、中央政府から2名の教員の予算が確保されていますが、学校の建物・施設、教材、2名以外の教員のコストは地元コミュニティに任されています。

現地では、1980年代に、現地出身の僧侶、U Thu Wanna 師（敬称ポンポンジー）が僧院を創設し、現在では高校までを有する教育機関として機能しています。コンピューター教育も行われています。そこで1週間、ワークキャンプの一員として、子供たちへの外国語（英語、日本語等）の授業、コミュニケーションスキル、環境、地域開発、農作業や清掃活動、こどもたちとの交流活動に参加しました。また、現地指導者（ポンポンジー）との教育や発展・開発に関するディスカッションなども行いました。ミャンマーのNGOは設立後2年と日は浅いですが、専門的知識を有しており、活動の有効性や持続性、地元へのインパクトの十分な配慮を行ったうえで活動が展開されていました。



インレ湖の漁民



水上都市



村の入り口の波止場

「都市（ヤンゴン）から遠いので、学校を終えても地元で農漁業の従事する子供が多く、教育の意義を理解させるのが難しいが、都市に出て、所得を得るための教育よりは、もう少し人間的（ヒューマン）な教育ができる」というのがポンポンジーの感想です。現地では、地域資源を生かした開発に取り組もうとしている開発僧の方のお話も聞きました。



村に到着



ワークキャンプの授業風景



食事時間



湖上のファウンダー・パヤー寺院



村の子供達



村の市場